

「遊び」論議をめぐる

本田 和子

「遊び」の重要性が改めて話題になり、保育内容の中心は「遊び」に置かるべきだなどと、ことごとしい論議が、いまさらのように展開されたりする。このこと自体は間違いないが、また、決して悪いことではないが、しかし、いま、こうした論議が起こってくる背後を考えると、そこには、意外に大きな「何か」、そう、人間の変貌を予知するような「あるもの」が隠されているのではと思えて、いささかの戦きを禁じ得ない。

ことごとしく論じられねばならないほど、子どもたちは「遊び」から遠ざかっていくのだろうか。「子どもとは遊ぶものだ」という、私どもが自明としていたあのテーゼは、所詮、虚妄に過ぎなかったというのか。とすれば、このテーゼは、いつから私どもを呪縛

し、さながらにそれが子どもの本性であるかのように、私どもの眼を覆いかくしてしまっていたのだろうか。

「子ども」と「遊び」とが不可分に結び付いたのは、どうやら十七、八世紀以降のことらしいと、西欧の歴史は語っている。しかし、正確に言うなら、それは、大人たちが遊ぶことを止め、かなりの量の遊びを子どもたちに手渡してしまったということであろう。かつて、遊びは、大人と子どもの別なく、人間の生を彩る祝祭的な活動の様式であり、時の流れをいきいきと脈打たせる、重要な節目であった。遊びとは、曆の中に組み込まれた、人間の生のかたちだったのである。

わが国の場合も、おおよその動きは、同様に迎えることが出来そうである。たとえば、天正年間（一五七三―一五九二）に狩野永徳の筆になるとされている『洛中洛外図』（上杉本と呼ばれる）には、羽根つき・こま廻し・つな引き・闘鶏など、四季折々の遊びに、大人と子どもが隔てなく打ち興じ、戯れ合う情景が、いきいきと描き込まれていた。

しかし、元禄頃（一六八八―一七〇四）に、一つの節目がある。その典型例が「いんじ」と呼ばれる飛礮合戦の禁止。河原の石を拾って、両軍が盛大にそれを投げ合う石合戦は、時には死者も出るほどの危険な遊びながら、年に何回かの徹底した蕩尽とうじんの時として中世史を彩ってきた。死者の中に、年齢の低いものが混っていることから見て、恐らく、子どもたちも共に参加し、石を拾い、それを運び、時には非力ながらそれを投げさえしたのであ

ろう。先の『洛中洛外図』にも、この石合戦の場面が描き込まれていた。

元禄の通達は、くり返し、低年齢者の参加禁止を訴え、遂には、市中での飛礮合戦そのものを禁止するようになる。こうして、空間的な自由を奪われた石合戦は、やがて暦の外に追放され、人々の生きた生活の中から姿を消していった。しかも、それは、単に「いんじ」の遊びだけにとどまらず、大人たちの日常から「遊び」をしめ出し、それを「児童」として、幼いものたちの独占物へと変貌させる動きでもあった。江戸の中期以降、「児童」という呼称で遊びが記録され、遊ぶ子どもの姿がしばしば画材とされたのは、こうした時の推移の所産だったのである。

子どもが遊ぶのはよいことである。彼らがのびやかに、いきいきと遊ぶ姿は、私どもを楽しませてもくれる。しかし、それが、私ども大人が「遊び」を失なった結果であると考えるなら、彼らの遊びを見つめる眼は、より錯綜した光に彩られるだろう。

そして、いま、改めて「遊び」の重要性が叫ばれる。かつて、大人たちが手放した「遊び」を、いま、子どもたちまで手放そうとしているという危機感にかりたてられて……。
歴史は、また、一つの大きな変り目にさしかかっているのかも知れない。

(お茶の水女子大学)